



文は信なり

2021年初夏号 42号特集

「このごろ思うこと」

目次

P1 駒田隆 P2 本田真貴 榎尚子 P3 三浦喜代子 篠田一志 P4 安東奈穂美
長谷川和子 P5 山角正子 西山純子 P6 奈良ノリ子 佐藤晶子 P7 山本千晶
山本披露武 P8 長谷川和子 編集後記 JCPのPR欄

1)の道

駒田 隆

先日、ある本を読んではいたら、万葉集の次の歌が引用されていました。巻第十一にある歌です。

「思ふ人來むと知りせば八重むぐら

おほへる庭に玉敷かましを」

大意は「あの人が来ると知っていたら、庭の雑草を抜いて、玉石を敷いて待っていたのに」という思いを歌っています。ちょうどイースターの頃だったので、わたしはこの歌を読みながら、今、イエスが来られる、とわかったら、何の準備をしてお待ちするだろうか、という思いを感じたのです。

いえ、準備ができていだろうか、と思ったのです。イエスの来臨を知って、顔を上げてお迎えできるだろうか、そんな思いでいっぱいになりました。

クリスマスと自負しながら、いざイエスとお会いしたならば、イエスのお顔をまともに拝めるだろうか、そんな思いだったのです。イエスを信じることは、当然イエスの後を追うことになるでしょう。「人の子は、仕えるために」（マルコ一〇・四五a）来た、というイエスのお言葉に、わたしは従えるでしょうか。九一歳を超えた今でも。

しかし、古代ローマの政治家にして哲学者

だったキケロは書いています。「愚か者は己の欠点や咎を老年の所為にするものだ」

二人の前途有望な青年を前にして、キケロは語るのです。「もし仮に長く生き進んだとしても、春の佳候が過ぎ秋や冬が来たことを農夫らが嘆くほどには嘆くに及ばない。春がいわば青春を表し、来るべき実りを約束するのに対し、残りの季節は実りを刈り、取り入れるのにふさわしいのだから。そして老年の実りとは、何度も述べたように、以前に味わった善きことの豊穡なる思い出に他ならないのだ」

イエスとの対面は、イエスを信じたときに、すでに始まっていたのです。イエスの復活を信じた時に、イエスは目の前にいらっしやうたのです。改めて、何かを準備するのではなく、信じるのが玉石であり、信じたことが、「豊穡なる思い出」であったのでした。



永遠の契約

本田真貴

ある日の夕方、犬の散歩の準備をしていた。空が急に曇ってきたと思うと、見る間に雨が降り出した。雨は嫌だなど思ったが、気を取りなおし、濡れてもよいよう支度して、玄関の扉を開けた。

すると、灰色の雲の中、太く薄く虹が架かっているのが見えた。

「お母さん。虹だよ。早く来て見て」

二人と一匹で、柔らかな光のプリズムを楽しむ。雨が小止みになったので、犬と歩き出す。虹はさらに大きく天に弧を描いた。

虹は神が二度と洪水で人類を滅ぼさないと約束した契約のしるしである(創世記九章)。今私達はコロナ禍の暗雲の中、死者と感染者の数に怯え、右往左往している。暗雲の中でも希望を持ちたい。十字架を見上げ、聖さに与るための訓練に素直に従って、最後まで福音の喜びを宣べ伝える者でありたい。



長い約束

榎 尚子

用事があって区庁舎に行った。手続きしていると、「もしかして教会の方ですか」

と窓口の人に聞かれた。年配のその男性は

「僕、下石神井のあの教会に一度だけ行ったことがあるんです」

と言うではないか。さらに榎さんは教会の隣でしたよね、などと言う。なんで彼は私のことをよく知っているのだろう。

三十四年前、教会で特別伝道集会をした。

当時、三浦綾子さんの新聞小説「夕あり朝あり」が東京新聞に連載されているところだった。白洋社を起こした五十嵐健治氏の一代記だった。

会員の中でその方の息子さんと親しい方がいて、教会にお呼びしたのだった。

一九八七年五月。「心の豊かさは何から得られるか」白洋社副社長・五十嵐有爾氏の特別集会、と教会五十周年史にあった。創業者・

五十嵐健治氏もご息夫妻もとても熱心なクリスチャンで、その集会には多くの人が来たことを覚えていて。その時まだ若い青年と私は三浦綾子について話しこんだらしい。私は残念ながら新来会者の彼を全く覚えていなかった。

三浦綾子ファンの彼はその後いろいろな会に出て研鑽を深めていったそうだ。何人か

の指導者の名前を覚えてくれた。三浦綾子は教会の中にいて、教会の外の人々の心をとらえている一人である。特別集会のチラシを見てあの小説は本物なんですと話しかけてくる人もいた。

「僕は三浦綾子は好きですが、キリスト教はどうもそこまでいなくて」

そういうこともあるだろう。今の教会堂の場所を覚えてそこを後にした。

教会には多くの人が来る。特別伝道集会を毎年するし、子どもたちには教会学校もある。

イースターやクリスマスにはいつもチラシを用意する。いつもの日曜礼拝に初めてくる人だっている。

しかしその中から教会員になる人は多くはない。コヘレトの言葉十一章に「水の上にパンを投げる」話がある。その時は投げっぱなしで終わるかもしれないが「多くの日の後それを見いだす」、というのだ。この区役所の方は昔教会に一度行ったことを、三十年前のことにもかかわらずはっきりと覚えていた。

コロナが収束したらまた彼に声をかけてみよう。今は教会の礼拝は近くのごく一部の人だけで守っている。遠方の会員はリモートだ。早く元通りになって、特別集会をしたい、と誰もが思っている。文学を入り口に求道者に、そして会員になってくれたらなあ。

天国の散歩道 三浦喜代子

運動靴のひもをきつちりと結び、足踏みを
して具合を確かめる。ポシエットを腰に回し
て、さあ、出発である。

コロナ騒ぎ以来日課となった一人歩きを
「冒険の旅」と密かに名付けて粋がつてみる。
が、行先は何のことはない、勝手知ったる住
まいの周辺にすぎない。

毎日同じ道では飽きてくる。そこで、行き
と帰りは変えてみる。区内の東西南北の極地
点に立ってエベレスト登頂の気分にする。名
もない細道の一筋まで踏んでいくつもりでい
る。

区境がすべて川だと初めて知った。東と
南は江戸時代からの掘割の川である。戦後ま
もないころは台風のたびに決壊し、難義した
ものだ。

今や川べりはえんじ色の遊歩道になり、桜
並木に変わっていた。鳥たちが群れを成して
泳いでいる。これが何十年と住み暮らしてき
た自分の町だろうか。

街路樹にも目が向かった。楠木、ゆりの木、
すずかけ、ハナミズキ、公孫樹、モクレン、
モモ、八重桜などが手入れよく植えられてい
る。

ある日、ビルの谷間の道を歩いていた。
突然、どこかで見た街の一隅に見えた。た
まらなく懐かしい。いったいどこだったろう
か・・・。

フラ・アンジェリコの『受胎告知』を観に
行ったサン・マルコ修道院への静謐な小道か、
いや、違うかも。

次から次へと思い出の小箱の蓋が開いて
いく。私はもはや自分の町ではなく、未知の
地を旅していた。

ひたひたと熱い思いが込み上げてきた。
思わず、主よ、感謝します！と、何度も叫ん
だ。うれしい思いが胸いっぱいになり、体
中が膨らむようであった。

と、今度は今までの神の恵みの数々が早速
りの映像のように浮かんだ。
マスクの下で、私は泣いた。

主は散歩の中におられた。足元もおぼつか
ない老女に濃厚接触され、ともに歩いて、変
哲もない古びた街の眺望を変えてくださった。

**あなたの御前には喜びが満ち、あなたの
右には楽しみがとこしえにあります。**

詩篇十六・十一

今日も主と二人連れの旅に出る。そこはす
でに天国の散歩道だと、このごろ思っている。

眩き 篠田一志

「クリスチャンとは何者？」。
神さまを知らなかった古い自分が元気に
なると必ず出る眩きである。

続いて「遅くに信仰の道に入ったので、救
われていないのかもしれない」と不信仰な言
い訳に行き着くのが常であった。

だが、今日の眩きは違っていた。
変わらない自分を嘆き、いつものように眩
きが始まる寸前どころからともなく「古い自分
に気づいたことは偉かったね」の言葉が聞こ
えてきた。

まるで、何も変わらないわたしを憐れんで
くださった神さまが「今のままでもいいんだ
よ」と言われているようで、なんだか嬉しく
なってしまう。

その日から古い自分を知ること、眩くと
きではなく、神さまにお会いできる祝福のと
きに変わったのである。

古い自我から決別できない愚かさを恥じ
る者が、誇る者に変えられた奇跡のときであ
った。

聖書を声に出して読む

安東奈穂美

疲れたママ

長谷川和子

この春、「小説パウロ」を読んだ。パウロの言動がいきいきと描かれていて、映像を見ているかのような感覚だった。

その頃、日々の聖書通読でパウロの手紙を読んでいた。いつもは黙読だが、パウロの心情に思いをはせながら声に出して読んでみた。迫害を受けながら、何とかして福音を伝えようとするパウロの切実な思いが迫ってくる。

聞こえるのは自分の声のほずなのに、何か違う響きを感じられる。音声もつと広がりをもつて立体的になっていく。小さな光の粒があたりに満ちていく感じがする。

パウロを通して語られる言葉が魂の奥に染み入っていく。

聖書を声に出して読む。文字を音声化するだけでなく、一つひとつの言葉や表現をイメージして読んでみる。すると、時間や空間を超え、聖書の世界に招き入れられていたのだ。そして、その時間は小さなリビングが礼拝の場ともなった。

聖書から目を上げると、窓から朝の光が差し込んでいた。

三月三十日、ある委員会出席のため桶川駅から上野経由熱海行きに乗車した。

浦和から乳母車を押して乗車してきた女性が赤ちゃん（五、六ヶ月位、男女の区別つかず）を抱きかかえながら「泣かないで、泣かないで」と言っていた。

私は赤ちゃんに向かって微笑んだがマスクをしてるので、分からなかったと思う。再び本を読んでいると、急に「ドタン」という音がして、赤ちゃんを抱いた女性がそのまま仰向けに倒れているではないか。

とっさにバッグを座席に放り投げ駆け寄った。と同時にそばの二人の女性も寄ってき十代半ばと後半位ではないだろうか、以下Aさん Bさんと現わす)

「大丈夫ですか」頭を打ったのでは、と何回も声をかける。赤ちゃんは女性の腹部に腰掛けた姿でキョトンとしている。

「ああ、疲れた・・・」と女性は言った。意識はあるのだと安堵する。同時に育児疲れではないかと思った。

「赤ちゃんを抱っこしてあげて」とAさんに声をかけ、起き上がろうとする女性に手を貸す。そこに車掌が来て事情を知ると、

「上野に着いたら休みましょう」と言った。

座席に座らせると堰を切ったように世の中への恨みつらみを、しゃくりあげながら話し出した。「世間の人は冷たい。コロナで気が滅入るので外に出れば、赤ちゃんに移ってもいいのかと言ひ、みんなの目が怖い」と。

「大丈夫よ、大丈夫よ」私は女性の背中を摩り続ける。「子育ての時は私も色々言われたわよ、良く分かるわ、気にしないことよ」とBさんは思い出したのか涙を流された。

Aさんは赤ちゃんを抱いたまま頷いている。二人とも床に膝をつき熱心に話を聞いていた。私はその姿勢に感動した。

「大丈夫」から「気にしないこと」を繰り返しながら私は背中を摩り続けた。

Bさんの向側の席に小学生の女の子が二人座っていた。女性には赤ちゃんの上に二人の子供がいたのだ。女性は乗客の視線に気づく余裕すらなく、育児のストレスで疲れ切つて涙を流していた。その女性に、居合わせた私たち三人が寄り添ったのだ。

会場への道々、自分の辛い育児の頃を（心身共に疲れ精神科に入院）思い出していた。

私が呼んだその日に、あなたは私に答え、私のたましいに力を与えて強くされました。

詩篇一三八・三

コロナの収束を祈る日々である。

白い穂

山角正子

道行く人々のマスク姿が当たり前に感じられる。以前は、異様な光景だと嘆かわしく思っていたのだが。ここに生かされていることの意味を問いつつ、今あるもの・できることを求めながら過ごしてきた一年。以前とは違う習慣や趣味をいくつか持つようになった。そのひとつは、これまで以上に散歩をするようになったことだ。歩きながら、道路わきの草花、雑草が醸し出す風情や季節の移ろいに心躍らせたり、それらの植物にまつわる思い出にひたったりしている。

先日は、明るい日差しの中、空き地一面に白い穂をたなびかせている雑草群を見つけた。銀白色にキラキラ輝く穂は、昨年九月に亡くなった愛犬マリンの毛並みにそっくりだ。穂を摘みそつと撫でてみる。手触りもマリンのもの。家族にもマリンの再会気分を味合わせてあげたいと思ひ数本手折った。

穂を撫でているうちに、子供の頃「ガムだ」と言いながら、この穂を食べたような気がしてきた。いや、記憶違いかもしれないと思う。

帰宅してすぐに「植物図鑑」で調べた。その植物の名はチガヤと知る。『チガヤの若い花

穂を口に入れて噛んでみましょう。ほのかな甘い汁が出てきます。サトウキビの近縁で、糖分を蓄える性質があるからです。ガムのような感覚で甘みを楽しんだ後、味がなくなつたカスは捨てます』と記されていた。「やったー」と小躍りしたくなる。四、五歳頃の記憶は正しかった。幼い頃の自分に出会った気がした。

コロナによる足踏み状態が続いている。が、新しい習慣・趣味が生まれたことにも目を注ぎ、解放される日を信じて、みことばに聴きながら進みたい。



記念日

西山純子

その日、空は私の好きな色でした。

父がオーダーして作ると良いと言つてくれたので、当時、私のお気に入りだった銀座S店でウエディングドレスは造ってもらいました。半袖で、初夏に相応しい布地でした。腕まである長い手袋が似合うとデザイナーは言いました。式場のC教会でも披露宴会場でも、今思うと可笑しなくらい私は緊張でいっぱいでした。多分難しい顔して固い表情でいたように思います。

彼の様子を観察する余裕など全くなく、幸せか嬉しいかを感じることもなく、司会者の誘導に乗って進行されていったように想われます。

その日がどうであったか、彼と語り合うこともなく、今年六十周年記念日を迎えました。今、心の底から、あの日をくださった神に感謝することが出来ます。彼は天に召され、一人で迎えたこの日に、これからずっと領き寄り添う彼の顔が重なります。

一つの出会いに永遠の恵みを賜りました。



さりげない一言

奈良ノリ子

コロナに対応する生活は、私たちをとかく家の中に引きこもらせませます。まして、寒い冬の間は庭の手入れさえ滞りがちです。ガラス戸を通して移り行く春の庭を眺めていたある日、さすがにじつとしていられなくなり、重い腰を上げてまず庭の外の草刈りから始めておりました。

その時、お向かいの小学生の女の子が私を斜めに見ながら、

「がんばって」と声をかけ、

外に遊びに行きました。

その子の家は新築で、彼女を赤ちゃん頃から

広場で遊んでいる様子を見てきました。

女の子の一声はわたしにとって何にも代えがたいものでした。そのご家庭の様子がかがえます。ご両親がいろいろな場面でお嬢さんを励ましてこられたのだろうと。

私も久しぶりに力がわいてきて、明るい気持ちになれました。さりげない一言が光り輝くことを心より感謝しています。



草刈婆 童の声に 励まされ

奈良 竜胆

かみのみ手

佐藤 晶子

昨年十一月初めに、千葉に住む娘の家族が我が家を訪れた。娘は久々の帰省で夫と私は六か月になる初孫とは初対面。娘と交代で育児にも協力的な若い父親の姿を見て、コロナ禍での様々な気苦労も感じさせない明るさと親密さが私達の不安を軽くしてくれた。三人は短い滞在で千葉へと帰って行ったが、年末年始でコロナの感染拡大に伴い再び自粛になり不慣れた生活を強いられていたに違いない。

今年も昨年よりも積雪が多く、四月に入っても降る日があり、寒い日々が続いていた。しかし桜の開花は例年よりも早く、先日の野外礼拝にはもう葉桜になっていた。ようやく春らしくなって外出する楽しみもできた。ところが変異株での感染拡大がこちらにもジワジワと忍び寄ってきた。油断はできない。

新型コロナウイルス感染防止にと国民全体に打ち出された注意事項を、新しい生活様式と理解して協力することは随分慣れてきたつもりだが、ちよつとした意識の違いで夫とつまらないう喧嘩になり、時々やりきれない気持ちになることが増えてきた。

そのような場から離れたいために好きな編み物などの手芸に没頭みるが、それは問題の根本的な解決にはならないと今までの経験

で解っている・・・。

ハツと気づいたのは、昔よく口ずさんでいた『ちいさななごに』という讃美歌だった。あいのわぎは小さくても／かみのみ手ははたらいて／なやみの多い世のひとを／あかるくきよくするでしょう（讃美歌第二編二六）、後半の「かみのみ手」がとても気になり出した。

ぜひとも、「神のみ手」が欲しい。それほどにあるのですか、どんな「手」なのですか、至急、ヘルプなんです、と心の中に深刻な声が出てくる。

日常生活の様々なところに、ギスギスした人間関係が現れてくる。小さい棘で刺した傷口が大きく開いて、なかなか治らなくなってしまう。

もし、ここに相手を思いやる優しさが自分にあつたら相手も笑顔で許してくれたに違いない。後から気づいて反省はするけれど、今の自分の中にはない、やっぱり神様の力が必要なんです。夫にはいつの間にか意固地になつて素直に謝れなくなつてしまふから。

おはようとのあいさつも／心込めてかわすなら／その日一日お互いに／喜ばしく過すずでしょう／（同二番）

イエス様にヘルプをお祈りして、讃美歌を歌いたい。

今を生きる (Carpe Diem)

山本千晶

下手でもいいじゃない

山本披露武

コロナ禍と言われ始めて二回目の春を迎えました。昨年の今頃、様々な情報が飛び込んできました。私は日々耳にする内容、提供する人物の背景が気になり始めました。その思いは現在も進行中です。

先日、ある記事を見つけました。高齢者の方の時間の過ごし方です。多趣味な方、それも人との関わりがある集まりに参加の方に健康の方が多いとのこと。またマスクの影響で話すこと声を出すこともままならない今、肺の機能が弱ってきているとのこと。

恐れと不安を煽る情報もあります。その背景を観察しながら今を生きる。その背

私には幸い礼拝を捧げ聖書からのメッセージを受け取る幸いがあります。聖書を背景とする生活によるコミュニティの交わりも守られています。日々、

希望を共有しながら

大切にすべきものを見出しつつ、今を生きています。



書くのが好きだったはずなのに、いつの間にか書けなくなってしまった。書きたいという気が起こらないのだ。

そのような私に、S兄からメールが送られてきた。『文は信なり42号』の原稿送付についてである。

駄目だ、とても書けない。どうしよう。そうだ、編集の都合もあるので、断るなら、一日でも早い方がよい。そう思っ、「今の私は、『歌を忘れたカナリア』で、とても書くことができませぬ。ペンを持つとうとう気にもならないのです。そのような訳ですから、誠に申し訳ありませんが云々」といったメールを書いて送信しようとした。

が、その前に、失礼があつてはいけないので、一度目を通しておこうと思ひ、読み直しをしている内に、『歌を忘れたカナリア』を書いた時の西条八十の心境が知りたくなつてきて、早速、ネットで調べてみた。

そこで「西条八十が幼かったころ、教会のクリスマス会に行き、華やかに灯された会堂の電灯の中で只一つ、自分の頭上の電灯だけが消えていることに気がついて、自分だけが疎外されているような気になり、ずいぶんさ

びしい思いをしたということを出し、創作活動に行き詰まりを感じていた当時の心境と重ね合わせて書いたのが、『歌を忘れたカナリア』だった」ということがわかった。

私などにはとても西条八十のような素晴らしい詩を書くことはできない。しかし書くということに行き詰まりを感じていたことは事実である。

それであれば、今は書けなくてもペンを握ってさえいれば、いつか必ず書けるようになる。そうだ、きつと、書きたくなつてくる。そう思うと、ようやくペンを持つとうとう気が起こってきた。

よし、下手でもいいじゃない。とにかく書こう！自分にしか書けない文章を書けばいいのだ。そう思っ、ペンを持つことにした。



私のサングラス 長谷川和子

桶川駅西口の四階建てショッピングセンターにいた。気付くと襟元に挟んだはずのサングラスがないのだ。あれ！何故？ 買物袋に入れた記憶はない。

過去に三回サングラスを紛失している。某大学の公開講座のとき、熊谷駅秩父線ホームのベンチ、高崎市役所上層展望台のベンチ。いずれも届出たが見つからなかった。

眼鏡屋の話では、落としたら戻ってこないのがサングラスで、度入りの眼鏡は届けられるとのこと。

帰途、気持ちは沈んだままであった。

そもそもサングラスは眼科医の勧めで四十代からかけるようになり、三〇年になる。半分諦めながら翌日も出かけた。不注意で無くしたのだから、祈りは虫がよすぎるような気がして短かくとどめた。

受付で事情を話すと店員はノートを見ながら引出しを次々に開閉している。

ああ、やはり無いんだ・・・。

と、差し出されたビニール袋の中に、私の眼鏡があった。「これです。私のです！」。スキップしたい衝動に駆られ、届けた方、店員の方々、神さまに感謝の祈りを捧げた。たかが眼鏡だが、されどサングラスなのだ。

編集後記

★すでに一年半にも及ぶコロナ禍で、JCPは神様の時を信じて、対面の集会はすべて休会しています。不本意な中ですが神様は知恵を与えてくださり、メールやラインを通して意志疎通ができ、今までにまして繋がりが強められています。

なによりもホームページを改装し、ブログラムを充実させることができたことは、大きな収穫です。ビジターも日々多数与えられ、「あかし文章」が神の鷲の翼に乗って運ばれているのを実感しています。

今回、「四二〇」を生み出せたのもまさに主の不思議です。会員の胸にたぎる使命感を手に触れるように感じ、明日への足が強くされています。主に感謝して！ (K・M)

★教会での礼拝がインターネットになり、例会の交わりが、友人との会食がなくなりまして。コロナ禍は身近な生活を大きく変えています。すこしも、歓迎したくない変化です。そんなとき、いつもと変わらぬ愛と憐れみを持つて向き合ってくくださる神さまにお会いしますと、なぜかホッとします。「四二〇」にはそのような神さまのお姿を見た者の声で溢れています。(K・S)

日本クリスチャン・ペンクラブ（JCP）の自己紹介

★起源は、1952年に発足した基督教文筆家協会にあり、村岡花子らプロの作家たちが立ち上げました。その後1963年に満江巖氏を中心に現在の名前に改名し、広く門を開いて、一般信徒が「あかし文章」を学び、書き、広める働きを進めて、現在に至っています。

★現在は2つのブロックで活動しています。★関東ブロック（関東以北の地域）★関西ブロック（大阪周辺と西の地域）です。活動内容は各ブロックが自主的に進めています。それぞれに作品集を出版しています。最新作は関東が『百花繚乱 21人の自分史』（1800円＋税）を、関西が『種を蒔く5号』（1300円＋税）を発行しました。ご希望の方は事務局までご連絡ください。★Web上にホームページを開いています。(http://jcp.daa.jp/)

◎「あかし文章」に関心のある方はこの誌のトップ頁、またはHPのアドレスにご連絡ください。関東、関西は隔月に例会を開いています。案内はHPに掲載します。